

ジュディス・バトラーと松浦理英子

視線の交差

市村孝子

< 1 >

女性たちの運動は、その反乱をペニス羨望の表れとみなし非難する人々に対する応答である限り、まったく理にかなったものだ——ドゥルーズ／ガタリ

松浦理英子の小説『親指Pの修業時代』上、下（1995）を読み、まさにこれはジュディス・バトラー（Judith Butler）が「レズビアン・ファルスと形態学的イマジナリー」（“The Lesbian Phallus and the Morphological Imaginary”）（1992）で展開した理論のフィクション化だと思った。女性のペニス、レズビアンのファルスという矛盾した主題に対し、それぞれ小説と理論という方向から、両者とも何とユーモラスかつ生真面目にアプローチしているのだろう、と感嘆したのだ。右足の親指にある日突然できたペニスからヒロイン—実の学んだこと、それはとどのつまり「貪欲にかつ理知的に惹き出し合った快感と欲望を性器結合によって一つのおおきな快楽に昇華させる型通りの性行為よりも、体も心もときめきで満たす密接な肌の触れ合いの方が好ましい」¹⁾ということであった。この小説において、男性器の女性器に対する思い込まれた優位性は、女性による男性器の思いがけない模倣という形で覆される。この松浦の企ては「“その”レズビアン・ファルスはフィクションだ。しかしおそらく理論的に役立つものである。なぜなら模倣、転覆、精神分析的な知識を得た読みが奉仕するような幻想的な特権の再流通があるからだ」²⁾というバトラーの言葉と呼応する。

もしかりに松浦、バトラーの順に読んでいたならば、「レズビアン・ファルス」は『親指Pの修業時代』の理論化だ、と感じていたにちがいない。誤解のないよう付けたすなら、松浦理英子がアメリカのフェミニズム理論を小説に利用したと言いたいのではまったくない。実際、松浦は笹野頼子との対談で、次のように述べている。

私はアメリカ型の性愛思想というのが嫌なんです。キリスト教文化圏で、しかもああいうふうに平等思想が「腐乱している」と言いたいぐらいに急進的なところというのは。だからフェミニストでも何でも、見倣うべき先進国としてアメリカ流の思想とか現象をどんどん日本に紹介している人がいるし、アメリカ流のやり方をそのまま日本でやろうとしている人がいるけれども、アメリカ的なやり方を輸入するのはどこかでおさえて、日本だからこそ生まれるような性愛観を打ちたてていったほうがいいんじゃないかという気がするんです。³⁾

そしてフェミニズムに関しては「たんに男が加害者で女が被害者であるという物語、あるいは

1) 松浦理英子、『親指Pの修業時代』下、河出書房新社、1995年、p. 297.

2) Judith Butler, “The Lesbian Phallus and the Morphological Imaginary” in *Differences*, vol. 4, num. 1, Brown University, 1992, p. 159.

3) 松浦理英子・笹野頼子、『おカルトお毒味定食』、河出書房新社、1997年、p. 194.

は男根は悪いものであるという物語、すべての性交はレイプであるという物語」⁴⁾をイデオロギーとして信仰する結果、「どんどん具体的な現実から遊離して、大雑把で硬直したものの見方」⁵⁾となったものと理解し、同調的というよりも批判的である。この松浦の述べるフェミニズムは「アメリカ流の思想とか現象をどんどん日本に紹介している人」あるいは「アメリカ流のやり方をそのまま日本でやろうとしている人」の唱えるフェミニズムのことなのだろうか。しかし最初に述べた私の直感が正しく、しかも「フェミニズム」と松浦とのそりが合わないとしたら、現在アメリカの代表的フェミニズム理論家および批評家のジュディス・バトラーは、松浦の言う「アメリカ流フェミニスト」ではないということになるのだろうか。

松浦は「親指ペニスとは何か」の中で、「真実を探究する動きは、いわゆる男根中心主義的です。性器中心主義を批判するにあたっては、当然否定しなければならないと考えております。」⁶⁾と述べ、また自分の小説を「性器中心主義を否定するもの」、つまり「男根主義的なもの」⁷⁾ではないもの、と考える。この文脈において「男根中心主義」と「性器中心主義」はほぼ同じものとして捉えられている。そこで当然、男根中心主義の批判はまさしくフェミニズムの行ってきたことではないのか、という疑問が生じる。もし日本のフェミニズムが男根中心主義の批判ではないとするなら、それはつまり松浦の論理に従えば、性器中心主義を批判してはこなかったということの意味する。

ここで興味深いのは、松浦の頭の中にフェミニズム＝性器中心主義＝男根中心主義＝アメリカという等式が存在するように思われることだ。そしてこの等式とは異なる可能性を彼女は頭に描いている。すなわち性器中心主義的ではない、男根中心主義を批判する「日本のフェミニズム」だ。それを現在日本で主流と松浦の考える「アメリカのフェミニズム」と差異化させるため、松浦はあえて自分の思考をフェミニスト的とは呼ばないのであろう。「小説がイデオロギーないしメッセージを伝える物として捉えられたり、書かれたりすることに対しては、違和感があります。」⁸⁾と松浦は述べる。

しかし松浦はフェミニストとしての立場はとらないとしても、レズビアン立場に立つという点でバトラーと一致する。バトラーのレズビアン立場からの西洋中心主義批判と松浦の「日本も西洋社会の文化のなかに半分くらいはどっぷり浸っていると思う」⁹⁾という、日本文化の西洋化、特にキリスト教的イデオロギーの影響に対する深い自覚とそれへの批判意識は、根底においてつながりをもつのではないだろうか。

以下、バトラーのフェミニズム批評におけるレイシズム批判、西洋中心主義批判と松浦の小説における畸形のモチーフとの接点を示したい。

『意味ある身体——セックス¹⁰⁾の言説的限界について』(*Bodies That Matter: On the Discursive Limits of Sex*)の序論において、バトラーはこの本が「精神分析的説明に内在するヘテロセクシュアル化という規範(heterosexualizing norm)の構造的静止状態に対しての、精神分析的視点において明らかに価値あるものを捨て去ることのない挑戦」¹¹⁾を意図したも

4) 松浦理映子、「文学とセクシュアリティー」, 早稲田文学第8次214, 1994年 3月号, p. 47.

5) 松浦理映子, 「文学とセクシュアリティー」, p. 47.

6) 松浦理映子, 「親指ペニスとは何か」, 『親指Pの修業時代』下, 河出書房新社, 1995年, p. 330.

7) 松浦理映子, 「親指ペニスとは何か」, p. 330.

8) 松浦理映子, 「親指ペニスとは何か」, p. 330.

9) 松浦理映子, 「文学とセクシュアリティー」, p. 39.

10) 性別という意味での英語の sex の邦訳をセックスとすることとした。それに対しセクシュアリティーという意味での性は「性」と記述する。

のと述べている。そしてその挑戦は「通用すること、暴露すること——ネラ・ラーセンの精神分析学的挑戦」(“Passing, Queering: Nella Larsen’s Psychoanalytic Challenge”)の中で、フロイト、ラカンの精神分析学を出発点とし、「性的差異は言語と同じくらい一次的で、性的差異の前提なしには話すということも書くということもない」とする精神分析学派フェミニストたちにも向けられる。なかでもバトラーは「性的差異が人種的差異を含む他の種類の差異よりもより一次的でより根源的とする」¹²⁾という主張の「白人性」に異議を申し立てる。つまり「それ自身人種により印づけられていない“性的差異”と呼ばれる関係がある」¹³⁾という前提は「性的差異は白人の性的差異であり、白人性は人種的差異の形ではない」¹⁴⁾という意味で白人中心主義的であると。

精神分析学は「女性にはファルスが存在しない」、「女性の本質的にナルシスト」「女性のペニス羨望」といった言説から、「男根的」としてフェミニズムの立場から批判されうる。しかしバトラーは、性的差異を一次的とすること自体の「白人性」を普遍的視点に立った「男根的」なものとして捉える。そして性的差異を出発点としてきたフェミニズムを、性的差異を他の差異と交錯するものとして捉えることにより書き直す。つまり性的差異を一つの性的差異ではないものとして、あるいは性的差異とは別な言葉で書き直すことにより精神分析学の「白人性」すなわち「男根性」に挑戦する。

この論文におけるバトラーの精神分析学の「男根性」への挑戦は、ネラ・ラーセンの小説『通用』を精神分析学への挑戦として読む読みにあると考えられる。バトラーはこの小説を「精神分析学的理論を明らかに人種と関係をもつやり方で書き直すために重大な意味合いを持つ、欲望、転位、嫉妬の怒りの理論化」¹⁵⁾として読むが、それはどのようなものだろうか。

ハーレム・ルネッサンスの黒人女性作家ラーセンによる小説『通用』(*Passing*) (1930)には、アイリーン、クレアという二人の黒人のヒロインが登場する。アイリーンは黒人の医者をつとして持ち、その中産階級的生活を何よりも大事にしている。一方外見上白人として通るクレアは白人の夫に自分の正体を知られるのを恐れながらも黒人社会に戻りたいと願う。小説では二人の間にレズビアン関係があることがほのめかされる。アイリーンは自らも白人として通るが、白人として通るだけでなく白人と結婚し、また性的情熱を殺さないクレアに嫉妬の感情を抱いている。アイリーンはまた、夫ブライアンとクレアとの情事を想像することに、自分のクレアへの思いを投影する。クレアはアイリーンにとり同一化したい対象であると同時に愛の対象でもある。しかしアイリーンは中産階級的価値観に縛られ、自らの欲望を殺そうとする。最後にクレアは窓から落下して死ぬが、小説の中でその直接的原因は明らかにされない。クレアは自ら飛び降りたのか、アイリーンの手がクレアを窓から押し出したのか、それともクレアの夫ベルーによるクレアが黒人であることの暴露が引き金となったのか。すなわち“Nig! My God! Nig!”がクレアの死を暗示するのか。以上がバトラーの読みと問いかけだ。

バトラーの読みは人種とセクシュアリティのどちらか一方に照準を当ててではなく、「黒人性」と「ホモセクシュアリティ」を「クイアー」という言葉でつなげ並列させる。「ク

11) Judith Butler, *Bodies That Matter: On the Discursive Limits of Sex*, Routledge/New York, 1993, p. 22.

12) Judith Butler, “Passing: Queering: Nella Larsen’s Psychoanalytic Challenge” in *Bodies That Matter: On the Discursive Limits of Sex*, p. 181.

13) Ibid.

14) Ibid. p182.

15) Ibid.

イアー」は形容詞として使われる場合、正常性からの逸脱を表すが、バトラーはラーセンが小説で用いる queer という言葉の動詞における用法を分析し、次のように述べる。

隠しておかれるべきものを密告するという意味の言葉として、queering はセクシュアリティと人種両方の、言語の中での暴露——言語の抑圧的な表面に亀裂をいれる暴露——として働く。¹⁶⁾

バトラーはクレアの死を、クレアの夫ベルーの queering, すなわちクレアがホモセクシュアリティを通して黒人であることが暴露される言葉、“Nig! My God! Nig!” とのつながりから読み解く可能性を提示する。

このようにクレアの表象する「黒人性」と「ホモセクシュアリティ」に対しベルーの表象する「白人的男性性」が対置されるが、その「白人的男性性」はクレアとアイリーンとの間を隔てる抑圧的な力であると同時に、観察し判断を下す規範的な力でもある。

ベルーの監視、彼の行使する暴露という力は、歴史的に根の深い白人男性の視線の社会的力だが、その男性性は人種的浄化という儀式としてのヘテロセクシュアリティを通して確立され保証される。彼の男性性は彼の白人性の神聖化を通して以外は確保されえない。¹⁷⁾

バトラーはここで、ベルーの行うような観察し暴き出し判定を下すという行為を、精神分析学のやり方と連関させているように思われる。バトラーは自我、自我理想、超自我、罪悪感、良心、といった精神分析学の用語を用いて、クレア、アイリーンの間にあったホモセクシュアルな欲望とその抑圧の分析を試みる。しかし二人の関係性を暴く力としてのベルーの「白人的男性性」はまさに精神分析学のメタファーとなる。すなわちベルーの男性性が白人性により確保されることが逆照射される。つまり「男性性」は性的境界だけではなく人種の境界に基づかなければ成り立たないものとして説明され、精神分析学の男女対立的図式はその内側から切り崩される。ラカンの言う象徴界は性的差異を統制する規範だけではなく、「人種化という規範」(racializing norms)¹⁸⁾によっても構成されるという観点は、セクシュアリティにおけるさらに異なる規範と同時にそのあり方の多様性を示唆する。

バトラーが人種という観点を導入することにより、精神分析学を書き直しているとするれば、松浦は畸形という概念を導入することにより、セクシュアリティに関する通念を書き直していると私は考える。バトラーと松浦は“性”にこだわりながらも、“性”を特権視しない点でも似ている。松浦は畸形という概念によりいわば「人間化という規範」に挑戦しているように思われる。

『親指Pの修業時代』は、人間と非人間の境界にある生が文化の中に生きられるかどうかを、“性的”人間としての人間という通念を疑問視することで、問いかける。松浦は日本において現在「性的であれ」というのは一つの大きな強制力として働いている、と考える。貞操や処女性といったキリスト教的拘束の影響の反動として、今度は性的自由が人間としての自由だという通念が幅をきかせている。そのような西洋化という文脈における日本の性の通念、それを松

16) Ibid. p176.

17) Ibid. p184.

18) Ibid. p182.

浦は批判したいと考える。

性には通念がありますよね。生殖のための性であるとか、快楽のための性であるとか。性というのは男と女がおたがいの性器を組み合わせる行為であるとか、そういう通念があるわけです。わたしは、最初からそういう通念を批判するつもりで、書いているわけなんです。¹⁹⁾

こうした通念は、オイディプスコンプレックス、去勢不安、ペニス羨望、ヒステリーといった精神分析学的概念とも絡み合いながら、日本人の自己や身体観、性愛観に反映していると思われる。それほど人間は“性的”なのか、“性”にアイデンティティーの基盤を置いているのか、という松浦の問いは、「性生活をもっていない人はかわいそう」「なんらかのかたちでセクシュアリティをもたなければならない」²⁰⁾といった「性的であれ」という強制力の強い西洋的人間観への問いと根を同じくするのではないだろうか。

ところでこの人間観への問いは、フーコーにより提出されたものであることを、バトラーは「性倒錯」(“Sexual Inversions”)の中で明らかにする。すなわちフーコーによれば、セクシュアリティとはある禁止や制裁により生み出される「言説的に構築され高度に規制された快楽と身体的交換のネットワーク」²¹⁾として、一般的な考え方とは逆に身体より先に位置づけられる。すなわち身体が先にありそこからセクシュアリティが生じるのではなく、セクシュアリティがセックスというカテゴリーを身体に与えることで身体は可視化される。つまり身体にアイデンティティーの原理があるとするのはセクシュアリティだ、というふうにセックスとセクシュアリティを逆転させる。さらにフーコーによれば、「いかなる人間も完全に矛盾することなくセックスにより印づけられなければ、人間として受け取られず、人間として認知されえない」ばかりか、「セックスの矛盾は、まさしくのけ者、非人間化された者と人間と認識できる者とを区別する」。²²⁾バトラーはセックスはセクシュアリティの生み出したフィクション、とする点でフーコーに依拠するが、さらにイリガライによるフーコーの構造主義の批判を踏襲する。すなわち言説の中でセックスは普遍的とされる男性のセックスと等しく女性のセックスは「見えないアイデンティティー」として言説から排除されていると。²³⁾

このように考えると、私が『親指Pの修業時代』をバトラーの「レズビアン・ファルス」のフィクション化と感じたのは、両者が女性のセックスの可視化を試みる過程でセックスが規範的セクシュアリティ、ヘテロセクシズムあるいは松浦の言う「性器結合中心的性愛観」²⁴⁾の生み出す幻想ということを明るみに出す点において一致するためと思われる。ヘテロセクシズムにより統制される象徴界において、レズビアンが「人間と認識できる者」から区別されるように、右足の親指にペニスのある女性も畸形的存在として「人間と認識できる者」の領域から逸脱している。両者が言説、すなわち文化の中で「人間」と見なされるうるのは、フィクションの世界においてである。しかし実は両者とも、「人間と認識できる者」と「人間と認識できない者」の区別自体が実はフィクションに近いものであることを示そうとする、たいへんラディカルな視点を共有している。

19) 松浦理英子, 「文学とセクシュアリティ」, p.41.

20) 松浦理英子, 「文学とセクシュアリティ」, p.40.

21) Judith Butler, “Sexual Inversions” in *Feminist Interpretations of Michel Foucault* edited by Susan J. Hekman, The Pennsylvania State University Press, 1996, p66.

22) Ibid. p67.

23) Ibid. p68.

24) 松浦理英子, 『親指Pの修業時代』下, p.329.